

## 私の知る若い女性リーダー グロリア・アリーニ（インドネシア）

2006年に私は、名誉あるサンガレンシンポジウムの「明日のリーダー」に参加しました。そこには世界各国から才能溢れる若者が集い、各参加者は彼らの国の次の世代の指導者となるような人びとばかりでした。しかし私はこのような榮譽にあずかるようなことはこれといってしていません。与えられたテーマに従って2000字のエッセイを書いたところ、有名な審査員の委員会がたまたま私のエッセイに十分な価値があると判断してくれたことで参加する資格を得たのでした。

私はこのような機会を得ることができたことに大変感謝しています。世界の指導者の話を聞き、仲間と意見を交わすことでシンポジウムから多くのことを学びました。しかし私は学校の外で自身の力量を具体的に示せていないにも関わらず、ヤングリーダーと呼ばれることの簡単さに当惑しました。

インドネシアにはヤングリーダーの会議や組織、団体がおそらく10はあります。厳しい入会基準があり、よってそのような組織に所属すること自体が最終目標となっています。どの地点において中身（真のリーダーシップ）が外見（ヤングリーダーの肩書）によって色あせてしまうのでしょうか。

しかし、ある25歳の女性との出会いが、私のインドネシアの若者に対する信頼を回復させました。

彼女はインドネシアの小さな村、ブキティンギで生まれ育ちました。彼女の村には断続的な電気の供給しかなく、停電は一日おきに起こるため、夜間に勉強することは大変困難を伴います。

それにも関わらず、彼女は義務教育を全うし、非常に競争の激しい国家試験に合格し、インドネシアで最高の大学であるインドネシア大学に入学しました。彼女は19歳のときに、両親の賛成のもと、家を出て首都へと移りました。彼女にとって村を離れるのは初めであり、何かを成し遂げるまで村に戻ってくるつもりはありませんでした。

彼女は大学生生活初日に大学生生活で成し遂げたい項目のリストを作成しました。

- ・優等生名簿に載る
- ・学生評議会の一員になる
- ・交換留学制度によってシンガポールに行く
- ・学部の首席卒業生になる
- ・Jhons Hopkin 大学で修士号を修める

彼女は、ジョンズホプキンス大学の綴りを間違えていました。彼女のルームメイトは都会育ちで小さなときから英語を学ぶという特権を得ていたので、それを見て笑いました。



インドネシアで活躍する女性リーダー

「違うわよ、ノビ、ジョンズホプキンス大学はそうやって綴るんじゃないのよ。“J-O-H-N-S”よ。それに“Hopkin”のあとに“s”がつくのよ。ジョンズホプキンスよ。英語力を改善しなきゃ。」

嘲ったような口調が今でも彼女の心の中に残っています。

5年が瞬く間に過ぎ、少女はインドネシア大学公衆衛生学部を首席で卒業しました。そして学期交換制度によってシンガポールのナンヤン理工大学に留学しました。彼女はまたシンガポールのNGO、ヌサンタラ開発計画でボランティアを行い、電気のなかった村に明るい光をもたらしました。村は彼女が生まれ育った村に似ていました。

この秋、この少女はフルブライト奨学金をもとにジョンズホプキンス大学で修士課程を始めます。インドネシアに戻った後、人びとの健康や福祉を改善できるよう公衆衛生学の修士課程を始めるのです。

「未来のリーダー」という言葉は彼女の口から一度も発せられたことはありません。

インドネシアで私は2通りの「ヤングリーダー」を知りました。一方はこの名誉ある肩書を荣誉バッジのように身につけ、学業の優秀さによって自己を確立していますが、他者のために何か行動したことがほとんどない者です。そしてもう一方は、社会をよりよくするために苦勞しながら実際に活動しているにも関わらずあまり顧みられていない者です。彼らは自身のことを「ヤングリーダー」などに見なしていません。彼らは彼ら自身の道徳心が指し示すことを率直に行っているだけなのです。

インドネシアには、“*bagai ilmu padi, makin berisi makin merunduk.* (実るほど頭を垂れる稲穂かな)”という言葉があります。真のリーダーとは自分自身のことをリーダーだと意識していない人びとなのではないのでしょうか。